

5. とびらの向こうには……

各務原市立蘇原第二小学校

6年 加藤 彩乃 角 優月 広井 佑貴那

5年 水野 会里菜

↓

敦賀市立敦賀西小学校敦賀市立中央小学校

6年 塚本 紗世 万年 美紀 高橋 鈴夏

小島 英莉

「冷そう庫にチーズケーキがあるわよ。三時のおやつに食べてね。お母さん、ちょっと買い物に行ってくるから」

そう言いながら玄関を出ていく母に向かって、ゆりなとかけるは、元気よく返事をした。

二人は、チーズケーキが大好きだった。時計を見ると、まもなく二時になるところだった。

母が玄関を出ると同時に、かけるは足早に一階へ下りて行った。

しばらくして、ゆりなが時計を見ると、時計は動いていないようだった。

「あれ？ 時計こわれちゃったのかなあ……」

家中の時計を確かめてみたが、すべて止まっていた。

「おかしいなあ。あ、そういえば公園にも時計があったはず。見に行ってみよう」

ゆりなは、キッチンにいたかけるに声をかけ、玄関を飛び出した。

「お姉ちゃん、待ってよお！」

かけるは、後から追いかけた。

「かける、おそいよ！」

「そんなこと言ったってえ。はあ、はあ……」

二人は公園に着き、時計を見た。

「えっと……。今は十一時半」

「あれ？ お姉ちゃん！ この時計、逆回りしてない？」

「えっ……。！？」

いつも遊んでいる沢上公園に来たはずなのに、そこにはなんと見たこともない立派なお城が立っていた。それもフランス風の……。ただ、時計だけはいつもの見慣れた時計だった。

「ま、まさか。ぼくたち……タイムスリップしたってこと？」

「ち、ちがうと、お、お、思うけど……」

ゆりなは、動ようしていた。

ゴーン、ゴーン、ゴーン。

お城の鐘がなったので、ゆりなはふり返った。すると、すぐ目の前に細くて白髪頭のおじいさんが立っていた。

「ゆりなおじょう様、かけるおぼっちゃま。ここに来られたのは、何かわけが？」

二人は、顔を見合わせた。

「あのう、おじいさん。どちら様ですか？」

「……なるほど。またトラブルが起こったようすな」

おじいさんは、ひげを触りながらニヤリと笑った。

「私の名前は、ウイルソンです。このお城で執事をしています」

優しそうなおじいさんだったので、二人は少し安心した。

「すみません。こ、ここはどこですか？」

かけるが聞いた。

「ここは、サワカミー・アントワネット村ですよ」

「は？」

「ところで、今、何時ですか？ 私たち、家の時計が止まってしまったので、いつも遊んでいる沢上公園に確かめにきたのですが……」

「まあまあ、そんなにあわてなくても。久しぶりにお会いしたのですから、お城の中でチーズケーキでも食べながら、お茶でもいかがですか？ 本当にお久しぶりですねえ、おじょう様。おぼっちゃま。かれこれ二百年ぶりになりますかね」

「エエーッ！」

ゆりなは、ひっくり返りそうになった。

「ほんとにタイムスリップしてきちゃったんだ！」

かけるは、ガッツポーズをしていた。

キュルキュルー、キュルルルー。

ゆりなのおなかが鳴った。

そういえば、おやつチーズケーキを食べていなかったことを思い出した。

「ウイルソンさん、お言葉に甘えてチーズケーキをごちそうになってもいいですか？」

それから二人は、おじいさんの後についてお城に入った。お城の中はとても広くて、鏡の回廊が続いていた。天井には金色に輝く絵が描かれていて、ごうかなシャンデリアがいくつもぶら下がっていた。

「うっわあ！ すごーい」

「ぼくたちの家とは大ちがいだね。お姉ちゃん、他の部屋も見て来ようよ」

そう言いながら、かけるは、どんどんどんどん進んで行った。ゆりなは、急いで追いかけた。

（あーあ。またチーズケーキを食べそこなっちゃったなあ……）

「かける、待ってよお」

「あ！ おぼっちゃま、おじょう様！ 気をつけてくださいよ！ 決して……」

おじいさんがなんか言っていたようだが、その声は二人には届かなかった。

しばらくすると、とびっきり大きくて、ごうかな扉の部屋を見つけた。ドキドキしながら、かけるが中をのぞくと、ドレスを着た女の人が紅茶を飲んでいて。★

「よくも偉大なる魔女ケリア様の姿を見たなあっ！ 動物にしてやるーっ」

振り向いた女の人の顔は、恐ろしい魔女の顔だった。

「ま、待ってお母さん。お母さんはいつも部屋に入ってきた子どもたちを動物に変えて

いたじゃない。もうやめてよーっ」

ゆりなと同じくらいの黒い服に黒い帽子の、かわいい女の子が飛び込んできた。

「うるさいなあ、ティアラはだまってなさい。外に出ていきなっ」

お母さんケリアに怒鳴られてもティアラは引き下がらないので、怒ったケリアは、一緒にいたゆりなを黒ネコに、かけるをリスに変えてしまった。

「フッフッフ、私に逆らうとこういう目にあうのさ」

ケリアは、不気味な声で笑うと、三人を指でつかみ、お城の塔に入れて鍵をかけてしまった。

「もうっ、お母さん、開けてよね」

ティアラがどんなに言っても、ケリアは、

「ふんっ、あんたも二人の味方をしたんだ。これくらいされて当然よっ」

と言って笑うだけだった。

その塔からの逃げ道は、小さい窓しかなかった。

「大丈夫。私は、魔女だから魔法が使えるの」

ティアラはそう言うと、魔法を使って窓をみんなが通れるくらいの大きさにした。

「私は黒ネコだし、飛び降りるよ。かけるは、どうする？」

「ぼ、ぼくは、お姉ちゃんの背中に乗って降りる」

「分かった。私は、魔法でパラシュートを出して飛び降りるねっ。ゆりなちゃんとかけるくんも安全にね」

「じゃあ、せーのっ、ジャンプ」

ヒューーヒューードンッ。スタッ。

「よし、成功」

「いたあっ」

「じゃあ、次はこわれたお城の時計まで瞬間移動ってことで……」

シュパ。

「着いたよ。この時計かぁ……」

「あれ？ ここに来た時間と一緒にだよ、ティアラ……？」

ゆりなとかけるが同時にさげんだ。

「ハァ、やっぱりこわれているのね。直す必要があるわ」

ティアラがそう言い、三人で原因を調べていると、歯車が三つ取れていた。

探していると、二つはすぐ近くに落ちていた。でも、もう一つはどうしても見つからなくて、ティアラが魔法を使うことになった。物探しの魔法を使うと、ケリアの部屋に落ちていることがわかった。

そこで、ケリアが三人を閉じこめた塔に三人がいるか様子を見に行った間に、ゆりなとかけるとティアラは、ケリアの部屋に忍び込んだ。そして、最後の歯車を見つけ出した。

その時だった。

「そこまでだ。塔の中の様子が静かだったからおかしいと思ったんだっ」

とケリアがやって来た。

「おまえたち、もうティアラにも手加減はしないぞっ」

「ティアラよ、カメになれーっ」

ケリアがそう言ったとき、

「やめろ、やめろ、やめろーっ」

と、かけるが言いながら、リスの器用な手で、歯車を持ち、ケリアの前に立った。
歯車で魔法が反射し、ケリアがカメになった。

「む……むっ……む……」

ケリアは、ティアラにしゃべれなくする魔法までかけようとしていたので、自分がしゃべれなくなってしまった。

「やったあーっ」

三人は、ハイタッチをし、残り一つの歯車を時計にはめにいった。

カチャッ。

そのとたん、時計が光り輝き、元の時計に戻っていた。

気がつくと、元の沢上公園にいた。時計の下に行ってみると、ティアラが身につけていた『ティアラ』が落ちていた……。